

なかな面白い滑稽を云つて人を笑はせる。僕は彼と話してゐる間に良い暗示も得たし、學ぶ事も少くなかつた。それに對して僕は感謝の心を失ひたくないと思ふ。唯しかし僕は彼と色々話してゐても、一つの問題についてお互ひに異つた意見を述べて議論してそれを追究するといふ事を経験したことが無い。外の人には知らないが、少くも僕は彼の考へと違つた考へを抱いてゐる場合にも、妙にそれが言ひにくかつた。(少くも今までは。)それを云つて強情を張ればすぐ不愉快な別れの元となるに過ぎないと思はれなかつた。それで僕は一つの問題について彼のとかなり違つた考へを持つてゐる場合にも、多く黙つて彼の話をきいてゐた。しかし例へば自分の意見を言はなかつたにしても、彼と長く交際してゐる間に彼の美點からは喜んで教へられ、自分の問題はひとり反省しながらそれを良い方に發展させて行くことができた。

この不十分な文を終るにあたつて、僕は武者小路君の健在を祈る。

直接會はない前から

水野 仙子

一三年前の或る日、本郷へ出ようと思つて友達と二人で豊岐坂坂を上つて行くと、坂を登り切つたあたりで、向うから歩い

て来る一人の青年に出會ひました。擦れ違つてから、私はそつと友達の手を引いて、

「今、擦れ違つたのは武者小路さんよ。」と言ひました。

「えッ？」と友達はびっくりして後ろをふり向きましたが、そこには無難作にスク／＼と歩いて行く一人の當り前な青年の後姿があるだけで、他にそれと顔けさうな人も見當らなかつたので、友達は怪訝さうな念を押すやうな顔をして、

「今、擦れ違つた人ツてあの人でせう！」と言ひます。

「えゝ、だからあれが武者小路さんよ。」

「さう。」と友達は尙ほも膽に落ちないやうな案外なやうな顔をしてゐました。

こんな風に私は直接武者小路さんにお目にかゝらない前から、お顔をお見知りしてゐました。

どうしてだらうとよく／＼考へて見たら、何でも四五年前の或る日、有樂座に近代劇協會が何かの芝居があつて、私達も三階の五十錢を奮發して見に行きましたのです。その折一等席に来て居られた氏を初めて連れの二人に教へられたのです。

武者小路さんは、三四人の白樺の人達とお出になつてゐたやうでした。何しろ遠くからではあり、細かな顔が幾つも／＼あるなかですから、なか／＼確かにあれが武者小路さんといふことを分り兼ねて居ますと、折よくだか折悪しくだか、武者小路さんは齒をおいぢりになるかなんかで、指を口の中にお入れに

二三年前の或る日、本郷へ出ようと思つて友達と二人で豊岐
殿坂を上つて行くと、坂を登り切つたあたりで、向うから歩い

なりました。それで早速、

「あ、今、口の中に指を入れた人がさうだ。」と言ふやうな譯で、
初めてハッキリいたしました。

それからよく家の御近所にいらした岸田劉生さんのお宅へ
遊びにお出になるらしいのを途中でお見かけするやうになり
ました。黒い縁の眼鏡をかけて、背の高い、肩の聳えた、いつ
も氣取ツ氣のない無難作さで、さつさと歩いて居られました。

その後武者小路さんに直接お目にかゝつたのは、一昨年の夏
丁度氏の「わしも知らない」が帝劇で上演になつた折のことで
した。武者小路さんはその夏行つて居られた鶴沼から御家族と
共に一寸上京されて、竹町のお兄さんのお宅にいらしたつたので
した。

私達のお伺ひしたのは丁度雨の降る日で、應接室の窓の外に
おとなしく降つて居る雨の音を聴きながら、いろ／＼な繪を拜
見したり、西洋の蓄音機でジブシイの歌などを聴かして頂きま
した。

武者小路さんのお話しになるのは、大層早口で、言葉のおし
まひに聲を落されたりするいで、初めての私はよくお話を聞き
漏らしました。調子も高い方ではなく、たゞ何處となく、ふく
らみを持つて居て上品に思はれました。

その日のことで忘れられないのは、私達が餘念なくお話をし
て居ると、トン／＼と駈けて来る小さな足音がして、ドア

とを分り兼ねて居ますと、折よくだか折悪しくだか、武者小路
さんは齒をおいちりになるかなんかで、指を口の中にお入れに

がツイと開くと、六つばかりになる兄さまの御子息がふいと現
はれました。そして捜しに來た小さいお嬢さんが見えなくて、

見馴れない人達ばかりであつたものだから、一寸失望したやう
な罪のない微笑をのこして、またばたと戸を閉め、トン／＼
と駈けて行つてしまひました。その小さな顔が入口に現はれた
刹那から消え去るまでの僅かな時間を、私は物に打たれたやう
に讀めて居ました。一言にして形容すれば、可愛いらしい中に
も何處となく毅然とした品位が伺はれ、技巧や眞似の及ばない
ある面影が見られたのです。その時初めてはつきりと公卿華族
といふ意識が私の頭に上り、何と言つても争はれないものだ
といふやうな氣がしました。そしてそのお子さんのお顔は、大層
よく武者小路さんに似て居られると思ひました。

その後間もなく武者小路さんは鶴沼を引き拂つて手駄ヶ谷へ
お移りになりました。私の家とはツイ鼻の先きだつたものです
から、其後も時々お邪魔に上りましたが、どちらかといへば私
はより多く奥さんの方へお親しくして、武者小路さんには餘り
お近づきませんでした。それはお仕事のお邪魔をしてはとい
ふ遠慮と、まだ何にも自分の物を持つて居ない——現はし得な
い自分を恥づる心から、着々と自己の道を開拓して行く同時代
の尊敬すべき先輩に對して、何となく氣がひけてならないので
した。

たゞ武者小路さんの印象としてふと頭に浮んで來るのは、そ

れに直接関係がないやうだけれど、あの麹町のお宅でちらと見た小さい甥御さんの顔と、それから千駄ヶ谷のお家の書齋に坐つて居られる成日の氏のお姿とです。其時私は黙つて繪を拜見しながら、他のお友達とぼつ／＼話して居られるのに耳を傾けて居ましたが、其日は今迄にない氏の落着きと、男性的な鷹揚さが感じられて、是まで單に無難作な、どちらかといへばそつつかしい方として映つてゐた印象に、或人格の深味を添へられたやうな氣がしました。そしてそれを、氏の爲めにも、また自分達の爲めにも大變嬉しい事に感じられたのでした。

武者小路君のユーモア

里見 弴

武者君には随分長く會はない。一番始終會つたのは、「白樺」を始めた時分だが、別に編輯事務　まつてゐた譯ではないけれど、雑誌でも出来ると先づ武者君へ持ち込むで来ることになつてゐるから、自然同人はよくあつて集つてゐた。武者君は相手變れど主變らずで、終日の客にも勞れずに、よく談じよく笑つてゐた。その頃同人間の言集で七義と云つたが、無邪氣な冗談を口から出まかせに云ふことが、非常にはやつてゐた。武者君がその名人だつたことは、一寸作物だけで接してゐる人には信じられないかと思ふ。尤も去年の「新潮」の小説の

なかのヨジミとネズミの間違ひなどは、期せずして武者君のユーモアが飛び出してゐるが――。どうも實に噴飯せずにはゐられないやうなことをよく云つたが、今はもうみんな忘れて了つて、例を挙げるものが出来ないのは残念だ。ラノイタシレットニズムなど云ふ言葉が発起したのも多分武者だつたらう。Heddy Gurneyを仕舞の方から讀むでみたらその意味は分るだらう。つまりその意味と反對な考を、かう馬鹿にして呼んだのだ。何しろ武者君は「七義」の名人だつた。その時分武者君は元園町の家の門の脇の武者長屋のやうな所に住んでゐたが、その窓の下を、伴れでもあつて話し乍ら通つて行くと、その聲を聴きつけて、窓を開けて、其處から顔を出して、『やい馬鹿とかういふのだ。毎日のやうに會つてゐるのだから、向うでやい馬鹿と云へば、こつちでも誰か來てゐるかい位のことだ。それがまるで挨拶だつた。やい馬鹿といふ時の少し笑を含んだやうな、ちよつとはにかんだやうな表情は非常に親しい感じで今でもはつきり思ひ出される。武者君の顔のなかで特徴のあるのは眼だ。話し相手を一寸見詰めてゐると直ぐきまり悪るさうにそらされることが多い。それが、人の前に後暗いことがあるとか、秘密をもつてゐるとか云ふやうな人々とはまるで違ふ。相手をきまり悪く感じさせるに堪へないと云ふやうな、賢く、思ひやりある、親しい感じのものだ。もう一つ特徴のあるのは、いふ云ひだ。性急な、非常な早口で、相手の答へることまで、自分の想

▼人、口録には、武者小路實篤氏の印象を
集めました。同氏は新しき作家として、思想

作品募集規定

各種目の最も優秀なる一篇に對して原稿料として相當圖書切符(五圓以下)を贈呈す。

募集作品種目

散文
短篇小説、書簡
文をも含む。
（十四字以内）
（十四字以内）

但し短篇小説は百六十行迄――

論壇
論文、
公開狀
二十行以
二十字以
八

短歌
限なし制
選者
金子薫園

選者 内藤鳴雪

家としての權威者ですが、同氏に就てのかういふ風な記事は餘り他の雑誌に出てゐません。武者小路氏の作品を愛讀する人にとつては、

入した寫眞は、大正三年に寫されたものです。令姪實光氏は實篤氏の實兄武者小路公氏の子令息であることを一寸申添へて置きます。同記事中里見弴氏のもは舊「文章俱樂部」に掲げたものを、收めたものであります。

▼七月號小説には有島武郎氏のもの、田村俊子氏のを掲げる事になつてゐます。

▼締切—毎月八日

抄稿は各種一人一篇——若しくは規定の數に限る。

用紙は半紙（白紙でも原稿紙でも宜し）書體は楷書、假名は平假名を用ゐること。

但し、題下の姓名は自由に記すこと。

投稿の篇首には、必ず文の種類を朱で記すこと、たとへば、散文は散文、論文は論文と記すのだ。

と、封筒の上には「新潮原稿」と記すこと。他のものと分ける。

五、投書の中には、他の用事の文句を記してはいけない。

定價 一部 二十三錢 六部 一圓卅五錢 十二部 二圓六十錢	送料 送料共 送料共	右誌代は總て前金御拂込の事 なる可く振替にて御送金の事 郵券代用御送金は一對増の事 外國行き郵税は一部四錢の事	大正六年五月廿七日印刷 大正六年六月一日發行	東京市牛込區矢來町三番地 編輯者 中根 剛十郎 東京市神田區美土代町二丁目一番地 印刷者 島 連太郎 東京市神田區美土代町二丁目一番地 印刷所 三 秀 合	發行所 新潮社 電話番町 八八〇九 振替東京 一七四二番	廣告 廣告取扱 廣告に關しては新潮社廣告係 たは傳報堂へ御照會下されまし	博 報 堂
--	------------------	--	---------------------------	--	---------------------------------------	---	-------